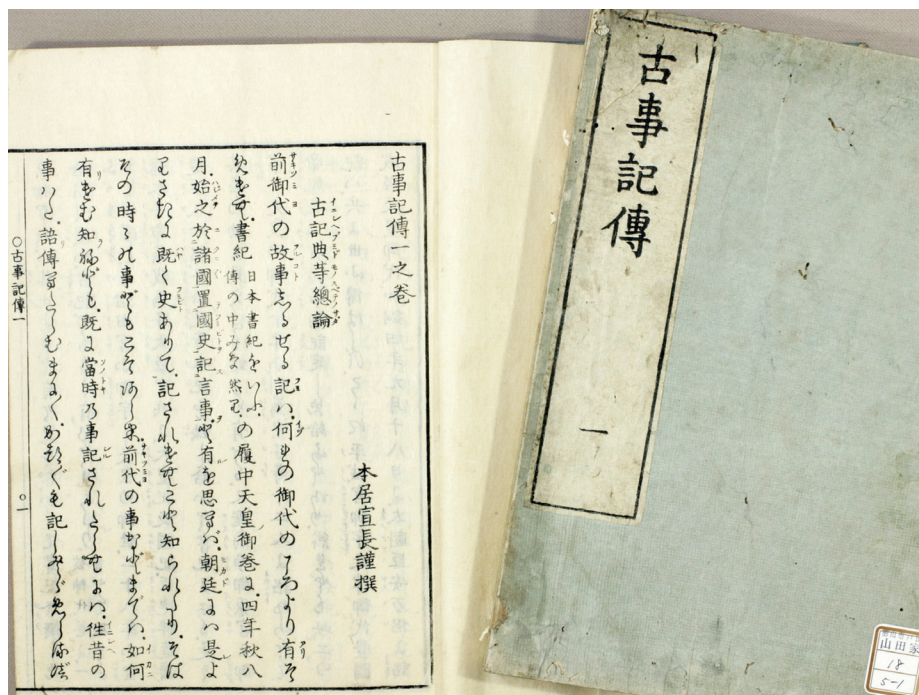


古文辞学と国学



* 山田家文書（周南市）和漢18「古事記伝」

解説

江戸時代の初めには身分秩序を重視する「朱子学」が広く学ばれましたが、中期になると荻生徂徠の「古文辞学」など、それを批判する儒学の動きがあらわれました。萩藩の藩校明倫館の2代目学頭をつとめた山県周南は、荻生徂徠が無名のころからの高弟で、防長や西日本に古文辞学を普及させる大きな力となりました。

一方で儒学の学問傾向を批判し、日本独自の文化・思想・精神世界を日本の古典や古代史のなかに見出していこうとする学問（「国学」）も生まれました。「万葉集」を研究した賀茂真淵や、「古事記」を研究し、35年かけて「古事記伝」（写真）44巻を完成した本居宣長は、その大成者です。国学は、近世末期には宗教的な性格を強め、やがて神道として組織され（復古神道）、尊王攘夷運動に影響を与えました。

* 当館内田家文書（防府市）の和漢書のなかには、荻生徂徠の著作「弁道」（和漢24）、「弁名」（和漢25）、「徂徠集」（和漢63）や本居宣長の著作「玉くしげ」（和漢19）等があり、古文辞学や国学の普及を見ることができます。

* 内田家文書や小田家文書（柳井市金屋）には数多くの和漢書が含まれており、近世の庄屋や豪商の学問的な傾向を知ることができます。